



舍利容器の複製品

## みやの うち い せ き      こんどう しやり ようき 宮之内遺跡出土金銅舍利容器

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター

令和5年(2023)10月、宮之内遺跡から中世の金銅舍利容器が出土し、大発見として注目されました。

令和6年(2024)4月から約1年に及ぶ保存処理によって、本来の輝きを取り戻すとともに、三次元計測・分析などによってさまざまなことが分かりました。

### - 発掘調査の概要と金銅舍利容器の出土 -

宮之内遺跡は大神神川の左岸扇状地上、中世には成立していたと考えられる宮内神社の北側に立地します。舍利容器が出土した6a区下層では、氾濫堆積による粗砂層の上面で自然流路1条、溝5条、土坑20基、小穴65が検出され、13～14世紀に伴う瓦器、土師質土器、瓦質土器などの破片が出土しました。

51号土坑(SK51)は隅丸方形の平面形をもち、一辺1.6m、残存深0.43mの規模をもつ大型の土坑です。土坑からは13～14世紀頃の土師質土器皿、下限年代が13世紀末～14世紀の炭化物と、舍利容器1点が出土しました。土師質土器皿は周囲から流れ混んだものですが、舍利容器と炭化物はそれより下位の東寄り、底面のやや上の位置で見つかりました。



図2 宮之内遺跡発掘調査位置図



写真1 宮之内遺跡6a区下層(東上空から撮影)



写真2 51号土坑(SK51)



写真3 51号土坑(SK51)土層(北から)



写真4 舍利容器出土状況



図1 宮之内遺跡の位置と周辺の地形

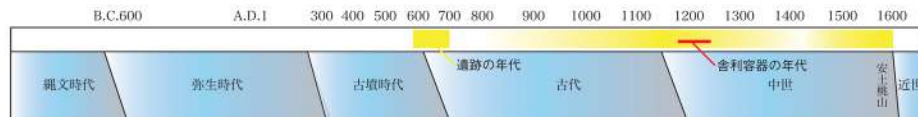


図2 宮之内遺跡と金銅舍利容器の年代

### - 金銅舍利容器と保存処理の概要 -

舍利容器は金銅製(銅の表面に鍍金したもの)で、定型化する以前のいびつな五輪塔形をしています。総高25mmと極めて小さく、精緻に造られ、容器は上下、別々に作られ、中央付近で接合されています。容器の内部には、釈迦の遺骨に見立てた舍利として青銅粒3～4粒を納めています。

舍利容器の外表面には絹製の2種類の布の繊維片が付着しています。舍利容器は斜めに傾いた状態で出土し、付近の土質が砂質で周囲とやや異なることから、砂袋に納められた状態で土坑に埋納された可能性も想定されます。

今回の保存処理では、付着した布の繊維片を極力残しつつ、舍利容器の本来の鍍金が見えるよう外面の錆落としや防錆処理を進めました。また、舍利容器は極めて複雑な構造で、製作時に使用された材料も薄く、小さく、脆いため、樹脂を使用した強化処理を行うとともに、複製品製作を行っています。

また、三次元計測を行うことで、舍利容器のより正確な形状が判明しました。

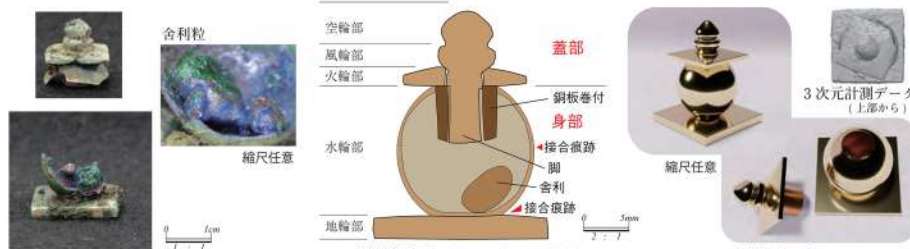
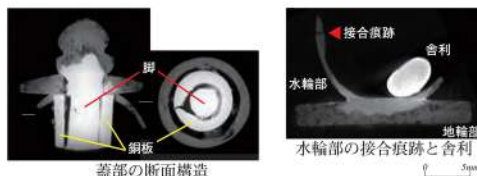


写真5 金銅舍利容器写真

図3 金銅舍利容器の構造復元図と復元イメージ図



蓋部の断面構造

図4 金銅舍利容器X線CT画像

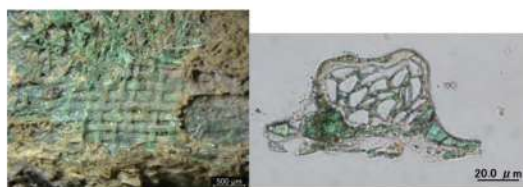


写真6 舍利容器付着布の繊維片(左)・布の断面写真



図5 金銅舍利容器の三次元計測モデル